

## 「寛容は不寛容と闘って勝てるのか」の背景

高田明典

現代は、これまでのどの時代にもまして、人々の不寛容さが際立っている時代であるように思われます。冬季オリンピックに出場した若者の服装が「礼を失している」として非難の声が多数あげられたことは記憶に新しいことでしょう。もちろんそれが、日本の代表として公式の場所に出るのにふさわしくないものであったことは、議論を待ちません。しかし二十歳そこそこの若者の少しハメを外した言動に対して、こうまで多くの人が怒り、非難の声をあげるというのは、いささか不思議なことです。そればかりではありません。テレビに出ているタレントや芸能人のちょっとした言葉じりをとらえて、パッシングのようなことが起こるのは、もはや日常茶飯事となっています。私たちは、「寛容」という言葉を忘れてしまったかのようにも見えます。

もちろん、悪いことを悪いとし、それを指摘することは、とても重要なことです。しかしそれは、異質なものを排除し、一つの価値観にこりかたまった狭い世界を構成することにもつながります。何が悪いことであり、何が良いことであるのかは、私たちの価値観に基づいて判断されるわけですが、その価値観は決して絶対的に正しいものにはなりません。ということにも思いを馳せる必要があります。「赦す」もしくは「大目に見る」ということも、同様に重要な私たちの知恵であり、この社会の方向性を良いものにしていくためには、むしろそのような寛容が必要となる場面も多く見られます。私たちは、みずからの価値観を強く信奉すると同時に、他者の価値観も尊重しなくてはなりません。本学科の基本的な理念である「多文化・共生コミュニケーション」とは、そのよう

な価値観の問題とは密接な関係を有しています。なぜなら、多文化・共生コミュニケーションとは、異なる価値観を持った者たちが、どのようにして「共に生きていくことができるのか」を考えることだからです。もしくは、「共に生きる」ことによって、私たちの意味や価値の地平が融合していくことを目指すからです。このとき「融合」とは、単なる迎合や受容を指す言葉ではなく、違いを深く認識しつつも、より広い論理・倫理の空間において認識しあうということを想定している概念です。

かつて渡辺一夫は「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか」という論文(『渡辺一夫評論選 狂気について』岩波新書、1993)において、寛容の概念の持つ自己矛盾した性質を検討しました。「不寛容」な言動に対して「寛容」を貫くということは、その不寛容を許容することになります。しかし「不寛容」な言動を指弾し非難するという行為は、自ら寛容さを捨てることになってしまいます。寛容であることは、その矛盾を背負っていくことを余儀なくされるものであると言えます。

今回のシンポジウムのポスターに書かれたキャッチコピーである「寛容は不寛容と闘って勝てるのか」は、そのような矛盾を表現したものです。

はたして私たちは、そのような問題提起に対して、どのように考え、何をできるのでしょうか。それを考えるのが、今回のシンポジウムの大きな目的の一つです。